

# 飯田C遺跡・古八幡付近遺跡・嘉久志遺跡

一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ

1995年3月

方建設局浜田工事事務所

教育委員会

## 序

建設省浜田工事事務所においては、活力に満ちた石見地方を目指して、くらしの利便性、安全性、快適性の向上を図り、人や自然にやさしい環境形成にも配慮しつつ、道路整備を進めているところであります。

江津地区においても一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして江津道路の事業を進めています。この道路は当面、山陰自動車道の機能も併せ持つ道路として活用を図ることとしており、国十の骨格を担う重要な道路でもあります。更に、過疎化が進み、若者の流失に悩むこの地域に活力を吹き込む道路でもあります。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

江津道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会や江津市教育委員会の御協力のもとに平成3年度から発掘調査を実施してきております。

本報告書（概報）は、平成6年度に実施した「飯田C遺跡」、「古八幡付近遺跡」、「嘉久志遺跡」の調査結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術及び教育のために広く活用されると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの御理解をいただくことを期待するものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心より謝意を表すものであります。

平成7年3月

建設省中国地方建設局浜田工事事務所

所長 伊藤 仁

## 序

島根県教育委員会は、建設省中国地方建設局の委託を受け、平成6年度に一般国道9号江津道路建設予定地内遺跡の飯田C遺跡、古八幡付近遺跡、嘉久志遺跡の発掘調査を実施しました。

江津道路建設予定地内遺跡の調査は、平成3年度に、江津市教育委員会によって着手され、平成4年度以降島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）が行っています。飯田C遺跡では、縄文時代から奈良時代に及ぶ多量の遺物が出土し、古八幡付近遺跡では、県内に類例のない武器型木製品を検出するなど、貴重な成果を得ました。本報告が、広く埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに多少なりとも役立てば幸いに思います。

なお、調査にあたりご協力頂きました建設省浜田工事事務所をはじめ、関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

島根県教育委員会

教育長 今岡義治

## 例　　言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成6年度に実施した、一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概況報告である。

2. 本年度は、飯田C遺跡、古八幡付近遺跡、嘉久志遺跡の調査を実施し、発掘地は次のとおりである。

飯田C遺跡　　島根県江津市二宮町神主イ791番地他

古八幡付近遺跡　　島根県江津市敬川町403番地他

嘉久志遺跡　　島根県江津市嘉久志町イ556番地他

3. 調査組織は次のとおりである。

事務局　　広沢卓嗣（文化課長）、勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）、野村純一（課長補佐）、佐伯善治（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　　足立克己（調査第5係長）、林健亮（同主事）、太田浩司（同教諭兼務主事）

調査指導者　　河瀬正利（広島大学文学部助教授）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、竹廣文明（島根大学汽水域研究センター助手）、中村友博（山口大学人文学部助教授）

調査協力　　宮本徳昭（江津市教育委員会）、河野敏弘（美都町教育委員会）

4. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S D—溝、S B—建物跡、S K—土壤、P—ピット

5. 本書で使用した方位は、国土調査法による第図座標系X軸方向を指す。

6. 本書に使用した「遺跡位置図」は、国土地理院発行のものを使用し、「調査区配置図」は建設省浜田工事事務所作成のものを利用し、一部改変して使用している。

7. 10ページ上段に使用した写真は、㈱ワールド航測が撮影した。

8. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真是島根県教育委員会で保管している。

9. 本書の執筆・編集は文化課職員の協力を得て、林と太田が行った。



## I 遺跡の位置と歴史的環境

江津市は、中国太郎の異名を持つ中国地方最大の河川江川によって形成された沖積平野と砂丘からなる。

江津市都野津町・二宮町・敬川町は、江津市南部の山塊が日本海に突き出した尾根の間にできた三日月形の沖積平野に位置している。飯田C遺跡は、江津市二宮町地内にあり、この三日月形の最深部にあたり、南側の山塊から流れ出す飯田川によって深く侵食された谷に面する丘陵斜面で、標高約50mを測る。

古八幡付近遺跡は平野の西端に位置する。高野山に源を発し、有福温泉を流れて日本海に注ぐ敬川が平野に流れ出す直前の扇状地上にあり、付近の標高は約8mである。

嘉久志遺跡は、この三日月形の沖積地と江津市中心部の砂丘地帯をつなぐ丘陵の東斜面に位置している。標高約20mを測り、北東方向には江川河口を望む。

江津市域では、現在までのところ旧石器時代の遺跡は見つかっていない。次の縄文時代には、市西部の波子町周辺で、大平山遺跡・波子遺跡など、縄文中期から晩期の遺跡が知られている。

弥生時代に入ると遺跡の数は大幅に増える。都野津町の稻荷山遺跡・半田浜遺跡、後地町の波来浜遺跡等が知られているほか、二宮町の雨ガ崎1号墓は山陰地方に特徴的な弥生時代の墓制として知られる四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘されており、注目される。

古墳時代には、敬川町古八幡付近遺跡、都野津町半田浜遺跡、二宮町宮倉遺跡など、集落遺跡が見られる。また、千田町ツヅラヤブ古墳に代表される高野山古墳群や、都野津町二又平古墳など、古墳時代終末期に造られた横穴式石室を備えた古墳が見られる。

和木川流域では、古墳時代に始まる須恵器生産の遺跡が見られる。嘉久志町久本奥窓跡では、瓦生産まで行っており、奈良時代まで操業していたことが分かる。

律令時代の遺跡では、二宮町宮倉遺跡・半田浜西遺跡が知られている。宮倉遺跡では、浜田市の石見国分寺と同文の瓦が出土している。また、半田浜西遺跡では、県内でも希少な奈良三彩が出土しており、公的な施設の存在が伺われる。

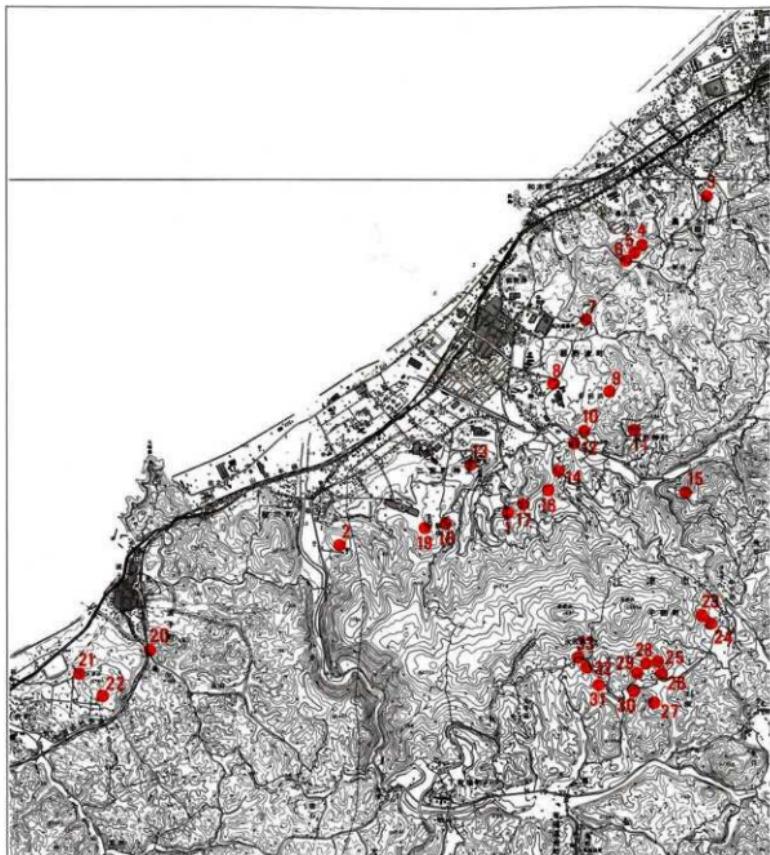
中世には、海運で栄えた都野氏が江津を中心に勢力を持っており、二宮町神主城跡は都野氏との関わりが深いと考えられている。

近世から近代に掛けては、江津市域で多く見られる都野津層に含まれる良質で豊富な粘土により、瓦・陶磁器の生産が活発になる。市南部に続く丘陵上には、多くの窯が造営されている。

〈参考文献〉 『江津市誌』 江津市 1982年

『島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)』 島根県教育委員会 1992年

『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査概報』 島根県教育委員会  
1993年



第1図 飯田C遺跡・古八幡付近遺跡・嘉久志遺跡と周辺の遺跡

1. 飯田C遺跡
2. 古八幡付近遺跡
3. 嘉久志遺跡
4. 久本奥窓跡
5. カワラケ免遺跡
6. 鹿伏山遺跡
7. 二又平古墳
8. 稲荷山遺跡
9. 半田浜遺跡
10. 半田浜西遺跡
11. 雨ガ絆1号墳
12. 二宮B遺跡
13. 青山遺跡
14. 二宮C遺跡
15. 神村城跡
16. 神主城跡
17. 恵良遺跡
18. 飯田A遺跡
19. 室崎商店裏遺跡
20. 波子遺跡
21. 大平浜遺跡
22. 越峠遺跡
23. 八幡社古墳群
24. ツヅラヤブ古墳
25. 寺床古墳群
26. 岩田氏宅裏古墳群
27. 白石古墳
28. 金クソ古墳
29. 峠田野地古墳群
30. ダイ古墳群
31. 大溢古墳
32. 恵後古墳群
33. 岩本古墳群

## II 調査に至る経緯

建設省により建設が計画されている江津道路については、平成元年度に、江津市嘉久志町～敬川町間の分布調査が実施され、その結果、13箇所の遺跡が確認された。

平成3年1月に建設省浜田工事事務所、県土木部、県教育庁文化課、江津市教育委員会による4者協議が行われ、平成3年度については、建設省の委託を受け、江津市が発掘調査を行うことになった。同年7月には、半田浜西遺跡の、平成4年1月にはカワラケ免遺跡・鹿伏山遺跡のトレンチ調査が行われている。これらの遺跡の調査後に建設省・江津市教育委員会・文化課の3者協議が行われ、平成4年度より文化課が本調査に入ることになった。

平成4年度には、鹿伏山遺跡・半田浜西遺跡の本調査と二宮C遺跡・室崎商店裏遺跡の一部のトレンチ調査を行った。平成5年度は、二宮C遺跡・カワラケ免遺跡・古八幡付近遺跡の一部・久本奥窓跡について本調査を、二宮B遺跡・古八幡付近遺跡丘陵部・飯田C遺跡のトレンチ調査を行った。

平成6年度には、飯田C遺跡・古八幡付近遺跡・嘉久志遺跡の本調査を行い、飯田A遺跡・恵良遺跡・神主城跡の一部・嘉久志遺跡・室崎商店裏遺跡の一部のトレンチ調査を行った。

## III 調査の経過

平成6年度の調査は、4月当初より、飯田C遺跡・古八幡付近遺跡の順に調査を行い、古八幡付近遺跡の状況を見ながら、年度後半にトレンチ調査を行う予定であった。

飯田C遺跡は、4月20日より重機を使用して表土掘削を開始した。5月12日には、第3平面で多量の土器を採集している。6月30日に清掃・写真撮影を行い、調査に伴う掘削を終了した。その後、ピットの実測、測量図の作成を行い、9月6日に現地調査を終了した。

古八幡付近遺跡は、7月5日に一部についてトレンチによる調査を開始した。このトレンチからは、すぐに遺物が出土したため、翌日からは全面調査に切り替え、12月22日まで掘削を行った。11月9日には、Ⅲ区で竪と考えられる杭列が出土した。Ⅲ区については、平成7年1月25日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、木製品の取り上げを行った後、1月27日に現地調査を終了した。なお、現地調査中の12月17日には調査指導会を、翌18日には現地説明会を開催した。

古八幡付近遺跡の調査中である12月6日からは、嘉久志遺跡の本調査を始めている。4月当初の予定では、嘉久志遺跡についてはトレンチ調査のみを行う予定だった。今回本調査を行った部分については知られていなかったが、「キョウツカ」という地名が存在することが江津市教育委員会より伝えられ、急遽、本調査を行うことになった。12月7日には土壤が検出され、12月22日に実測図を作成し、現地調査を終了した。

また、11月8日から12月15日までの間に飯田A遺跡・恵良遺跡・神主城跡の一部・室崎商店裏遺跡の一部についてトレンチ調査を行った。

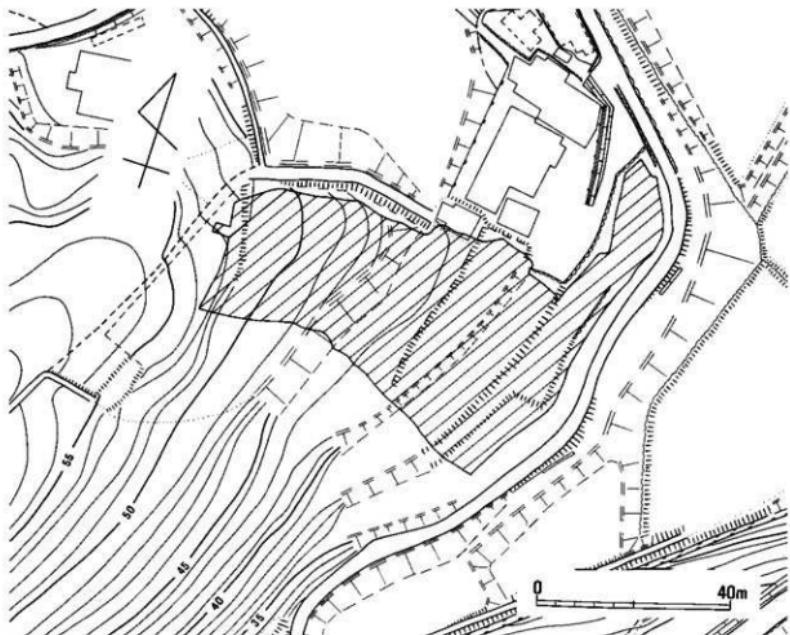
## IV 飯田C遺跡

飯田C遺跡は、江津市二宮町神主に位置する。遺跡は高野山から北に延びる尾根の先端近く、標高約50mの丘陵と、その東斜面である。付近は小河川により深く侵食された谷が南北に続いており、遺跡は、その谷に面した河岸段丘上にある。調査前の状況は、牧草地として開墾されており、完全な平坦面が階段状に続いていた。

調査は、各平坦面を上から第1平面、第2平面…第6平面と呼び、第1平面から調査を開始した。

第1・2平面は既に大きく改変されており、煙草畑と思われる畠がほぼ全面に広がっており、遺物の出土も少量に留まった。第3～5平面では、平坦面先端で大きく削平されているものの、平坦面奥では、遺構が残されており、柱穴と思われるピットが多数出土した。第3平面では、近代の植林や溜め池の造成等により大きく改変を受けており、埋土も全て造成土と考えられ、層位的な検討はできなかったが、古墳時代から奈良時代の集落の存在が伺われる。

遺物は、弥生時代から中世までの上器類をはじめ、ふいごの羽口やスラグなど製鉄に関わる遺物も見られた。



第2図 飯田C遺跡 調査区配置図 (1:1000)

縄文～弥生時代の遺物は量的にも少なく、小片が多い。古墳時代は、二重口縁を持つ土師器の壺等、古墳時代前期の遺物が目立つ。最も遺物量の多いのは奈良時代の須恵器で、つまみを持つ蓋壺等が多く出土している。また、土師器小皿等、中世に入ると考えられる遺物も少量出土している。

飯田C遺跡では、住居跡は確認できなかったが、ピットが存在し多量の遺物を出土している事から、この付近に古墳時代前期から奈良時代の集落が存在したものと思われる。また、縄文・弥生時代の集落も近くに在った事が予想される他、製鉄遺跡の存在も推定される。



飯田C遺跡全景

## V 古八幡付近遺跡

江津市敬川町の古八幡付近遺跡は、江津市敬川町403番地他に位置し、平成5年度に一部本調査を行っている。このときの調査では、水田部端に調査区を設定し、ピット70基、溝6条を検出している。

今年度の調査では、現道や水路の関係から調査区を5区に区分し、南西からI区、II区…V区と呼び、I区から調査を開始した。

I区は、県道下府江津線から塩泉守へ向かう道の南側で、現地表面より3m下方まで続く斜面を検



第3図 古八幡付近遺跡 調査区配置図 (1:1000)

出した。埋土は全て造成土で遺跡南東側の台地を削平したときに埋めたものと思われ、斜面からは遺構は検出できなかった。造成土中には、多量の遺物が含まれており、特に江津市域では数少ない縄文時代の土器が多量に含まれている点は注目できる。

地表より約1mは、道路部分の造成に使用されたと考えられる疊層が堆積していたが、その下層は褐色土と黒色土が交互に堆積しており、多くの遺物が含まれていた。造成土直下からは、近代の用水路もしくは水田の区画と考えられる石垣が「L」字形に検出され、その内側から多量の遺物が平面的に広がりを持つて出土した。遺物の大半は縄文土器で、黒曜石剥片等を小量含んでいる。この遺物を取り上げ、石垣を撤去すると古墳時代の土師器を中心とする包含層になった。

I 区は上記の通り完全な逆転層で、現位置を保った遺物は無いが、層位毎には時期的にまとまった遺物が出土しており、付近から一度に流れ込み、堆積したものと考えられる。

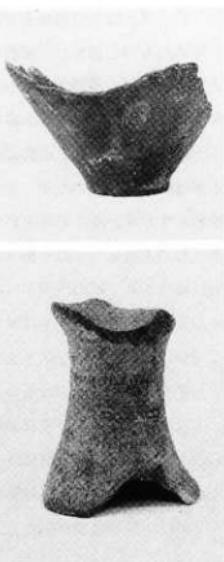
II 区は I 区の北側にあたり、東側が宅地によって造成されて



古八幡付近遺跡 I 区 遺物出土状況

いた。宅地部分西の県道側は、I区と同様の状況が予想されたが、実際にはI区よりもはるかに緩やかな傾斜で、遺構面が残存していた。宅地部分の標高は約8mを測り、ほぼ水平に削平されていたが、地山面は西に向かって緩やかに傾斜しており、標高約6m付近で調査区をほぼ南北に横切る溝が検出された。削平されていた宅地部分から検出された溝までの間は、緩やかに傾斜していたが、溝よりも西側は、ほぼ水平に調査区外まで延びており、その間には遺構は見られなかった。溝は、浅く緩やかなカーブを描き、幅約120cm、深さ約40cmを測る。溝中から弥生時代中期から後期の土器が多量に出土した。(写真右)

IV区は調査区東側の丘陵斜面にあたる。裾部は、宅地により大きく削平されていたが、裾部先端と斜面中程からビット・溝を検出した。丘陵裾部については、削平されている部分が多く、建物跡等は確認できなかったが、斜面の標高約16m付近には、小さなテラスがあり、住居跡を確認した。溝を巡らせた一辺3m程の小

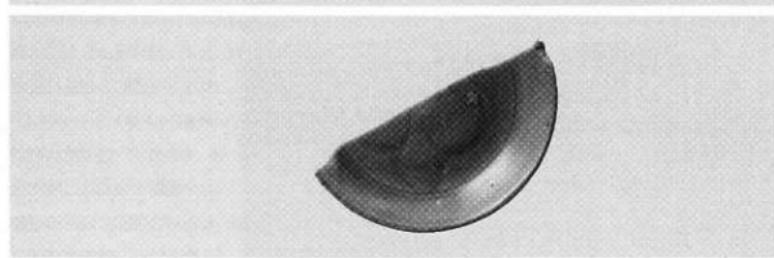
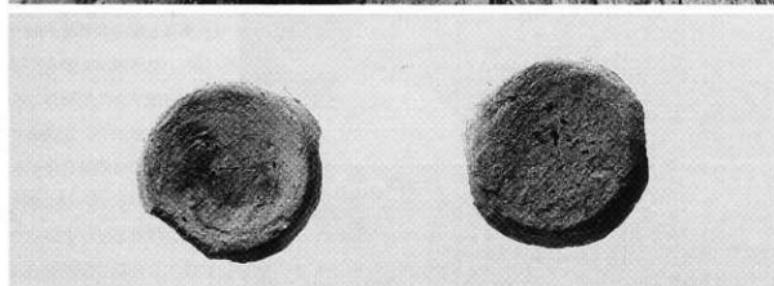


さなもので、奈良時代と考えられる須恵器類が出土している。

V区はIV区の北隣にあたる丘陵斜面である。畑地と思われる削平地・道が通つており、小さな段が続ぐ地形となっていた。埋土は比較的厚く、斜面上方でも50cm以上あった。埋土は表土直下から地山崩落土と考えられる赤褐色土が厚く堆積し、その下層に5~10cmの薄い黒褐色土が見られた。黒褐色土中からは、古代から中世の土器・陶磁器が出土した。

V区南側では、土器が集中して出土する部分が見ら





古八幡付近遺跡 V 区 写真上 遺物出土状況 写真中 土師器 写真下 白磁

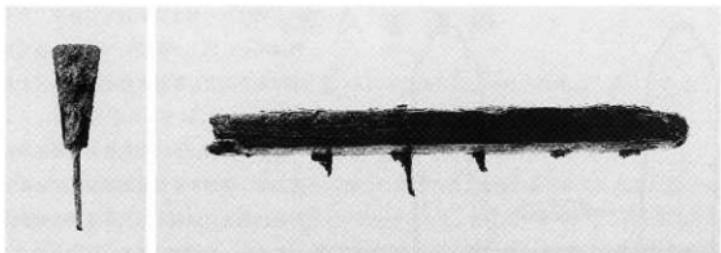


写真上 古八幡付近遺跡Ⅲ区全景 写真中・下 木製品出土状況

れた。土器は中世の土師器碗で、少なくとも6個体以上が重なるような状態で出土した。これらの出土遺物を取り去るとピットが検出され、柱根まで残存していた。検出地点が調査区際であったため、住居跡そのものの存在は確認できなかつたが、古代末～中世に住居があり、住居の放棄時に柱を切り倒し、何らかの祭祀を行ったのではと、想像できる。

Ⅲ区はⅡ区とⅣ区の間にある水田部で、調査前の標高は約8mであった。地表面から深さ約2mまで泥層が続いている。泥層中から多量の土器・木製品が出土した。造構面は、Ⅳ・V区側から緩やかに傾斜し、中央はほぼ水平で、Ⅱ区側で再び緩やかに傾斜しながら上昇している。地山面は、傾斜している部分では巨大な岩を含む礫層で、水平になっている部分では、しまった砂層、もしくは腐食土と思われる褐色粘土である。

土器類は、古墳時代初頭の土師器を中心に、縄文時代から中世までのものが含まれている。調査区のはば全面から出土しているが、



古八幡付近遺跡Ⅲ区出土金属器・木製品

II区に近い西側斜面近くが最も多い。II区の宅地によって削平された部分から崩落してきたものであろうか。

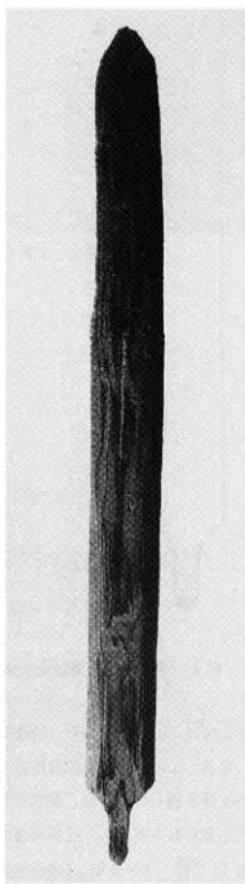
また、白磁等の貿易陶磁は、平成5年度調査区に近い東側から多く出土している。遺物量自体は少ないが、中世のものが目立っている。

III区泥層中から金属器も出土した（写真左上）。完形を呈するバチ形の鉄鎌で全長約10cmを測る。鍔で多少膨らんでいるが、薄く作られており、茎の断面は方形である。鎌身に対し、茎が短いことから、中世のものであろうか。

写真右上は木製農耕具と考えられるものである。断面方形の棒に四角形の穴を貫通させ、刃（？）を木製楔で留めたもので、両端の構造は不明である。同一個体と考えられるものが3点以上出土しており、50cm以上の長さのあるものと思われる。

木製品の中には、針葉樹の正目材を丁寧に成形し、両端を尖らせたものが見られる（写真右）。泥層からの出土で、他に伴出遺物は無い。この木製品は剣を模したものに見え、弥生時代後期から古墳時代頃の武器形木製品か、機織具と思われる。板材の両端を成形したもので、刃部は研ぎ出されていない。刀身は直線で表現されており、織り方の表現は無い。切先部分の造作はやや雑であるが、関から茎にかけては丁寧に成形されており、柄は表現されていない。関から茎にかけての部分は、銅剣の様な直角に切られるものではなく、緩やかなカーブを描いている。茎は刀身と同じ厚さで造られており、断面方形を呈す。古墳時代以前の武器形木製品は県内での出土は無く、山口県宮ヶ久保遺跡や大阪府の鬼虎川遺跡<sup>〔注1〕</sup>、奈良県の唐古・難遺跡等で知られている。

泥層中から出土した木製品には、角材の一面を鋸歯状に彫り込んだ階段状の木製品や曲物等の容器類が見られる事から、弥生か



古八幡付近遺跡Ⅲ区出土木製品

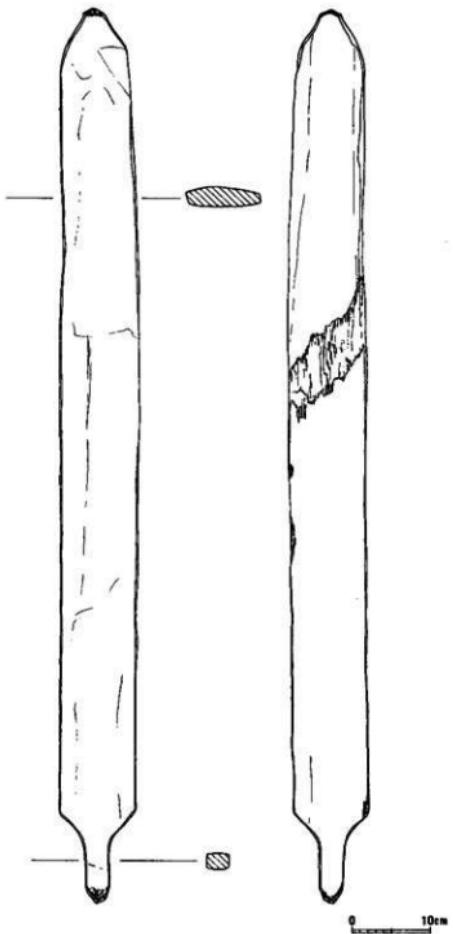


図4 古八幡付近遺跡出土木製品実測図 (1:6)

面白体は川跡と考えられ、調査区を横断するように南北に続いていると考えられる。

現在、この造構の時期は確認できないが、板材には薄いものが多く、造作が非常に丁寧で、かんなの痕跡を残していない。泥層中から出土した木製品とは加工痕が明らかに異なり、現在でも水に浮く材が見られる事から、近世以降のものと考えられる。

註1 「宮ヶ久保遺跡」『考古学雑誌』第63巻第2号 1977年

註2・3 「K 祭祀具」「木器集成図録近畿編原始」奈良国立文化財研究所 1993年

ら古墳時代の集落跡が近くに存在した可能性は高い。出土木製品については現在整理中であり、更に多種の物が含まれていると思われる。

泥層の下層は、灰白色の砂が厚く堆積しており、砂層中には遺物は含んでいない。砂層検出面はほぼ水平であるが、南から北に向かい、わずかに傾斜しているようである。砂層面には、杭が打ち込まれ横板を掛けた施設が調査区のほぼ全面に広がって検出された。この杭列は、ほとんどの場所で幅50cm程の間隔で、2列になって検出されており、南北幅約9mの東西に長い区画を作り出している。杭列の一部では、石を置いた場所もあり、単なる区画ではなく、道路状の機能も備えていたものと思われ、水田の畦と推定できる。この杭列に使用されている材には、ほぞ穴や繰り込みが見られるものが多い。また、板材も幅や厚さが一定ではなく、杭と同様にほぞ穴を持つものも多い。畦としては関係の無い機能を持つ材が多く、建築材を転用したものと考えられる。

平成5年度には、Ⅲ区東隣の発掘調査が行われ、多数のピット・溝が検出されたが、Ⅲ区内では検出できなかった。平成5年度調査区は、Ⅳ区から続く斜面の先端に当たるものと思われ、その様相もⅣ区に近い。

平成5年度調査区からⅢ区に入ってすぐに斜面が終わり、砂層面になっている。砂層

## VI 嘉久志遺跡

嘉久志遺跡は、江津市嘉久志町イ556番地他の東向き丘陵斜面、標高約20mに位置する。地元住民により、「キヨウツカ」と言う地名がある旨連絡を受け、急遽本調査を行った。

伐採を行った時点で、既に付近には玉石が散乱しており、経塚の期待を高まらせた。

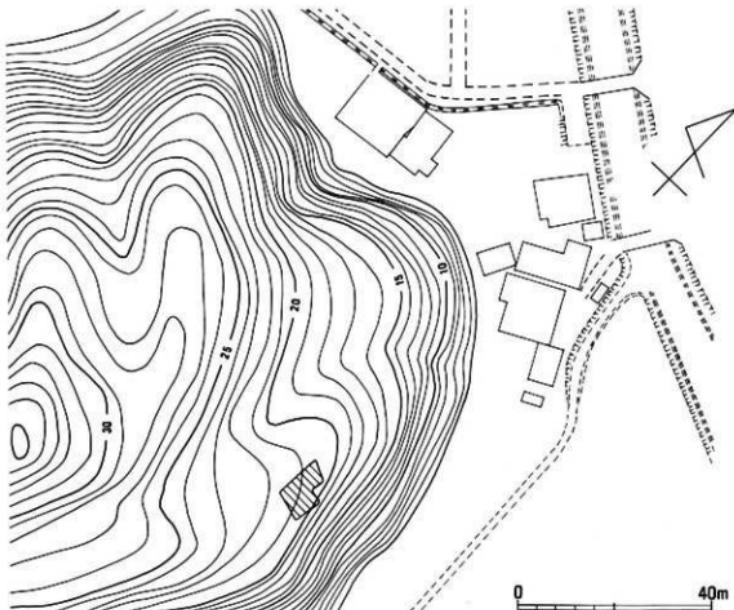
玉石は径5cm程の小さなもので、地表面から表土中まで半径2m程の範囲に見られる。表土は、5~10cm程の厚さで堆積しており、表土直下はすぐに地山となる。表土直下より土壤1基が検出された。

土壤は、長径1.6m、短径約1.4mの梢円形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は表土や地山とほぼ同様の鐵褐色を呈し、比較的柔らかい。遺物は出土しなかった。

この調査では経塚の存在を確かめることはできなかったが、玉石が散在しており、人工的な施設が存在したことは間違いない。土壤から遺物は出土しなかったが、状況から想像すると、近世の経塚か墓地であったと思われる。



嘉久志遺跡 土壌



第5図 嘉久志遺跡 調査区配置図 (1:1000)

## VII トレンチ調査

古八幡付近遺跡調査中の11月10日より12月22日までの間、江津市嘉久志町から敬川町の間のトレンチ調査を行った。調査箇所は、嘉久志町の嘉久志遺跡の本調査部分以外、二宮町の神主城跡の一部、恵良遺跡、飯田A遺跡、敬川町の室崎商店裏遺跡の一部で、嘉久志～敬川間では、嘉久志遺跡の一部、神主城跡の東側、室崎商店裏遺跡の一部を残している。

嘉久志遺跡では、3箇所が調査範囲として予定されていたが、内1箇所が粘土採取のため、既に削平されており、本調査範囲周辺の丘陵頂部から南斜面に掛けてと、インターチェンジ取付道となる北向き斜面の2箇所についてトレンチ調査を行った。丘陵頂部と南側谷中から須恵器小片を採集したが、遺構は見られず、既に畑により削平されたものと思われる。北向き斜面は、土砂崩れの跡が多くみられ、埋土が非常に厚かったが、遺構・遺物は見られなかった。

神主城跡は調査区南側の城跡本体部分から北に延びる2本の尾根が調査対象地とされていた。このうち、西側の1箇所についてトレンチ調査を行った。尾根上の緩斜面とその両側の谷について、人工的加工段の有無を中心に調査を行ったが、加工段・遺物は検出できなかった。丘陵北側の民家近くには、炭窯2基が見られた。

恵良遺跡では、調査範囲全面を対象に10本のトレンチを設定し、ピット・落ち込み等の遺構が検出された。遺物は、古墳時代の土器が出土した他、青磁碗の小片も出土している。丘陵の頂部から北側斜面は既に削平されているが、現在畠地となっている西側緩斜面上は、良好な遺物包含層になっているようである。恵良遺跡は、今年度発掘調査を行った飯田C遺跡と谷を挟んだ向かい側に位置しており、飯田C遺跡と同時期の遺構があるものと思われる。

飯田A遺跡でも調査範囲全面を対象にトレンチを設定した。このうち、丘陵頂部で石見焼の破片を大量に採取したために、トレンチを広げたところ、赤く焼けた、窯壁と思われる粘土塊が多数出土した。このことより、丘陵頂部には、石見焼の窯跡が存在するものと思われる。丘陵頂部から西側斜面にかけては、表土中から陶器器類が多数出土しているが、丘陵裾部から西側は宅地により、大きく改変されている。また、北側斜面からは遺構・遺物は検出されなかった。飯田A遺跡の窯跡は、出土遺物から近代に入る時期のものと考えられる。

室崎商店裏遺跡では、水田部を対象に3箇所にトレンチを設定した。東よりに設定した2本のトレンチでは、3m以上にわたって砂が堆積しており、遺構・遺物は確認できなかった。また、西側の丘陵直下に設定したトレンチでは、隣接する瓦工場に関係すると考えられる造成土の堆積が2m以上に渡って見られた。室崎商店裏遺跡水田部は、深い堤が在ったと言われており、遺構は確認できなかった。

## VIII む す び

坂田C遺跡では、住居跡こそ確認できなかったが、多数のピットが確認され、奈良時代を中心とする多くの遺物が採集された事から、付近には奈良時代の集落が在ったと考えられる。また、中世の遺物や製鉄に関する遺物については、すぐ東に位置する中世山城である神主城跡や、この地に勢力を持っていたと考えられる都野氏との関連が推定される。トレンチ調査で多数の遺物を採集した恵良遺跡は、坂田C遺跡とは谷を挟んだ向かい側に位置している事から関連が注目される。

嘉久志遺跡では、経塚を発見する事はできなかったが、近世から近代の何らかの施設が存在した事は間違いない。

古八幡付近遺跡I区では多量の縄文土器が出上した。残念ながら現位置を保ってはいなかったが、出土する土器のほとんどが縄文後期に集中しており、付近に縄文時代後期の集落があったものと思われる。

II区では弥生時代の溝が見つかっている。溝は調査区西端を南北に通っており、溝より東には遺構が存在しない事から、遺構は西側の県道部分、もしくは更に西に広がる可能性がある。

IV・V区では、奈良時代の住居跡の他に、中世の遺物が多く見られた。前年度の調査でも龍泉窯系青磁碗が出土しており、付近に12~14世紀代の遺構が存在するものと考えられる。

III区の水田遺構は、谷に沿って南北に広がる事は確実であり、今後の調査が期待される。また、杭列に使用されている材は建築材の転用であり、整理の状況によっては、更に新たな発見があるものと思われる。

III区で出土した木製品は針葉樹の正日材を使用したものである。武器型木製品と見る可能性の他、機械具とも考えられる。武器形木製品には、奈良県飛鳥池遺跡の工房跡出土の金属器工房の注文見本と見られる木製雛形のような実用品もあるが、多くは祭器と考えられている。遺物包含層出土のため時期については言及できないが、古八幡付近遺跡III区では、古墳時代から奈良時代の土器が多く出土しており、弥生時代の遺物も小量含まれている。

飯田C遺跡・古八幡付近遺跡・嘉久志遺跡  
一般国道9号江津道路建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査概報II

平成7年3月

発行 群馬県教育委員会  
松江市殿町1番地  
印刷 松陽印刷